View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

学習システム促進研究センター
『学習システム研究』第 2 号　2015(pp.37-48)

漢文を「読む」「理解する」ための学習過程の探究

―富永一登「『孤』を用いた文学言語の展開―陶淵明に至るまで―」を手掛かりに―

大野 綾香・富永 一登・山元 隆春

どうすれば高校生は漢文を読めるように，そして，理解できるようになるのだろうか。また，そのために教師はどのような指導をすればよいのだろうか。この問いに対する 1 つの答えを得るために，研究論文の構成・構造の分析や関連専門科学の基礎概念・基礎理論による読解を通して研究論文の作成過程を導き出し，学習者の学習過程への変換を試みる。対象の研究論文は，富永一登「『孤』を用いた文学言語の展開―陶淵明に至るまで―」(『未名』22 号,2004）である。結果，研究者の学習過程を 7 段階で示し，各過程における具体的な思考法を整理することができた。これを踏まえて，高校生が自ら漢文を「読む」「理解する」ことができるよう導くための教材開発のあり方を提案している。中でも鍵となるのは，学習者はもちろん，教師が作品に「興味を持つ」ことである。これまで実践されてきた漢文の授業をふり返ると，表面的な読み取りにとどまり，本文を深く読むという段階にまで進んでいないのが実情であった。本稿では，従来の漢文学習の抱える課題を克服する 1 つのヒントを見出した。
キーワード：漢文，理解のための方法（理解方略），学習過程，興味

An Exploration of Learning Processes for “Reading” and “Understanding” the Chinese Classics:

Through the Analysis of an Expert Thinking in Kazuto Tominaga’s “Progressing of Literary Language that Uses ‘Hu’ up to Tao Yuanming”

Ayaka Ohno, Kazuto Tominaga and Takaharu Yamamoto

How do high school students become proficient readers of the Chinese classics? And what kind of teaching methods could make students be such proficient readers? In order to resolve these questions, this study aimed to grasp the thinking process in an expert’s research paper as for eliciting a model of learning process for students through an analysis of the structure of the research paper and examining basic concepts and theory in the related field. The target research article was Kazuto Tominaga’s “Progressing of Literary Language that Uses ‘Hu’ up to Tao Yuanming”（ published in Wei Ming, 22, 2004）. The expert’s learning processes were organized in to 7 stages, and his thinking methods at each stage were described concretely. Based on this, the current article suggested how teaching materials should be developed so that high school students can attain “reading” and “understanding”

of the Chinese classics. The key is for the teacher as well as the learners to “become interested” in the literary work they read. Looking back at the teaching practices of the Chinese classics in schools to date, students’ learning often stopped at the surface level understanding without progressing to the level that called for a deeper understanding of the text. The current study suggests one strategy to overcome the challenges of teaching the existing Chinese classic studies, and to make a breakthrough to develop students into proficient readers of Chinese classics, for ensuring their rich language life.
Key Words: Chinese Classics, Comprehension Strategies, Learning Process, Interest

１．本稿の目的と研究論文の紹介

本稿では，研究論文の構成・構造の整理，専門科学者（富永一登）の関連研究内容による読解，関連専門科学の基礎概念・基礎理論による読解，専門科学者の論文の作成過程の再構築を通して，研究者の学びの過程を学習者の学びの過程に変換し，教材化に必要な内容と方法を探究することを目指す。

対象とする研究論文は，富永一登「『孤』を用いた文学言語の展開―陶淵明に至るまで―」（『未名』22 号,2004）である。執筆者・富永一登は，広島大学大学院文学研究科教授で，中国古典文学を専門としている。研究の主たる柱は,『文選』研究と中国古小説研究(志怪・伝奇)である。

本研究論文は,『文選』李善注の言葉を中心に,「孤」を用いた文学言語の陶淵明までの展開を考察したものである。これは，富永が取り組んでいる『文選』李善注を活用して六朝・唐代の文人たちの文学言語の創作過程を解明する研究の 1 つに位置づけられる。考察の主な対象は,『文選』採録の詩である。

なお，富永は「文学言語」という用語を用いているが，これは文学作品の中で用いられている言語を指すと考えてよいだろう。「文学言語」は，単なる言語とは異なり，作者の個性などが反映され，原義とは別に付与された意味やイメージを有する。したがって，その意味には，長年に渡って継承されるものもあれば，新たな創作によって時代とともに変化するものもある。

２．研究論文の構成と構造

本研究論文は,「一　古来の『孤』のイメージ」「二　宋玉から建安期における『孤』を用いた言葉の創出」「三　陸機による『孤』の評価」「四　陶淵明の『孤』」の 4 つの章から構成されている。各章の内容を要約する形で以下に示す。

まず,「一　古来の『孤』のイメージ」では，古来,「孤」は「鰥寡独孤」の「孤児」という特定のイメージが強かったことが指摘されている。『毛詩』の詩の中には「孤」の字は使われていないものの，孤独感は詠われており，その傾向は「社会生活・政治制度の中で一人の状態」であることを詠うものであったようだ。「孤」は「無父之子」というイメージが強かったために，孤独感の詠出には使われなかったと分析される。また，先秦までの「孤」のイメージは，主に「家族関係」「王の自称」「官職の称」「特産物」の 4 つであるとする。このことから,「孤」が限定された範囲の中で使用されていたことを明らかにしている。

つづいて,「二　宋玉から建安期における『孤』を用いた言葉の創出」では,「宋玉から前漢」「後漢から建安期」に分けて,「孤」を伴った言葉から「孤」に対する意識の変化を探っている。宋玉から前漢の作品には,「鰥寡独孤」の意を踏まえた「孤子」「孤独」といった従来から見られた言葉に加え,「孤立」「孤雌」といった新しい言葉が見られる。それだけでなく，この時期には,「孤王」「孤畝」等,「鰥寡独孤」の意を離れた言葉も作られるようになる。また，鄒陽「獄中上書自明」(『文選』巻 39)に着目すると，単独行動の意で「孤独」が用いられている。これは,「賦・詩の展開とともに,『孤』を用いた言葉の増大を予想させる」[1)]ものである。そして，後漢から建安期には,「鰥寡独孤」のイメージを離れた言葉が多数存在する。それは，寂寞・悲哀・憂愁を表現したもの,唯一の意で用いているもの，一人でいる状態，閑居と同様に使用されているものとある。2 つ目の用法は,「孤」と悲哀の関係を必然としない発想の芽生えと見ることができる。3 つ目は，経書には見られない「孤」の用い方であり,「建安期までにおける『孤』に対する意識の変化を象徴する例」[2)]と言える。

「三　陸機による『孤』の評価」では,「孤」に対する肯定的な評価が見られるようになったことを示している。魏・西晋・東晋の頃になると，前代までの継承はもちろんのこと，新たな創作が散見される。主に,「憂いや寂しさを想起させるもの」,「『孤』と憂愁の情の関係を必然としないもの」の 2 つの用法である。後者は，前代ではわずかであったのが，前者と同等に使われるようになっており,「孤」を用いた表現が古来の「鰥寡独孤」のイメージに拘束されなくなってきたことがうかがえる。また，特筆すべきは,「孤」に対する積極的な評価が見られるようになってきていることだ。陸機は,「文賦」(『文選』巻 17）の中で「孤立」への賛辞を述べており,陶淵明の頃には，隠逸への肯定的な思いを「孤」に託した表現も見られるようになる。

そこで，最後「四　陶淵明の『孤』」では，陶淵明に焦点を当てて陶淵明の用いた「孤」の意味を探っていく。陶淵明の詩文に「孤」を用いた言葉は 15 例あり（うち 8 例先例なし)，その中の 13 例を取り上げて考察している。「孤」に憂愁の情を伴わせているものは 7 例見られ，陶淵明は，前代までの表現を踏襲しつつも，独自に意味を込めたり言葉を創作したりしている。さらに,「帰去来辞」中の「孤松」「孤舟」「孤往」を分析すると,「独自の生き方を表す『孤』」にこだわる陶淵明の姿が見えてくる。その他の新たに陶淵明が創作した「孤介」や「孤襟」等の言葉からも,「孤」を独自性を表す語と捉えていたことが分かる。陶淵明の用いた「孤」から,「陶淵明は,『孤』を用いた言葉で自己の独自性を表現することによって，自己の生き方を確認し，自己の充実をはかるべく孤独を維持しようとしている」[3]ことが推測できる。その後，こうした陶淵明の生き方を称える者も出てきており,「自己の独自な生き方を堅持する特立独行に対する評価は，孤独の寂しさだけでなく一つの「風」として認知されていく」[4]のである。

本研究論文は「『文選』注の言葉を中心に，「孤」を用いた文学言語の画期となると思われる陶淵明までの展開」[5]を明らかにしようとするものである。以上の考察を踏まえ，最終的に富永は次のようにまとめている[6]。

> 『毛詩』と屈原の作品には見られなかった「孤」を用いた言葉は,「鰥寡独孤」を主としたイメージに始まり，後漢から建安期にかけて多様化の兆しが現れ，文章表現の比喩ではあったが，陸機による積極的評価を経て，陶淵明に至って完全に自己の心情を象徴するものになった。ここにまで至れば，あとは個々の詩人が場合に応じて自由自在に詩語として「孤」を使う素地が形成されたと言える。

ここまで論文の構成にしたがってその概要をみてきた。文学言語の展開を考察するにあたり，古来の「孤」のイメージ，つまり原義を最初に確定している。言うまでもなく,元々どのような意味で用いられていたかを確定しておかなければ，時代を経る中でどのような展開を遂げたかを検証することはできない。その後，新たな意味の創出の時期を探り,「鰥寡独孤」というイメージが強かった「孤」が，そのイメージを離れた意味を持ち，さらに肯定的な評価がなされるようになったことを，多くの用例や先行研究をもとに明らかにする。多くの用例を用いて，時代ごとに語の意味を判断，整理して実証するだけでなく，当時の代表的な詩人による「孤」の評価にまで言及するという論の構成が，本研究論文に説得力を持たせている。また，時代の流れの中での「孤」のイメージの展開を見た後，陶淵明の用いた「孤」に焦点を当てている。陶淵明の作品を分析することが，後代に継承されていく「孤」のイメージを探るのに最適であると考えたのだろう。なお，陶淵明の「孤」の考察に用いられている『自己愛とエゴイズム』（ハビエル・ガラルダ,1989）等の文献は，中

国古典文学領域以外のものであるが，富永の考えを裏付けるものとなっている。

３．専門科学者の学習課程

富永一登が本研究論文を執筆するにあたり，自身の『文選』研究，さらに，中国文学における孤独（感）や様々な詩語のイメージ等に関する先行研究を踏まえていることは言うまでもない。まずは，本研究論文に関わる『文選』李善注など基本情報を整理する。その後，研究領域全体から改めて本研究論文を読み解く。

３－１．本研究論文に関わる基本情報

ここでは，考察の主な対象とされている『文選』李善注，関連する研究内容として「陶淵明」「文学言語の継承と創作」「中国古典文学における孤独（感）」について整理する。

〈『文選』李善注〉

『文選』は，6 世紀初めに梁の昭明太子蕭統(501-531)が劉孝綽等と編集した約 1000 年間に渡る詩文集である。「文学言語創作の営為にとって最も重要な基準の 1 つ」[7]，「唐以後の詩人達の文学言語創作の軌範となり，中国文学史上枢要な地位を占める古典文献」[8]とされ，後世知識人の必読書となる。『文選』の中国文学に及ぼした影響の大きさは想像に難くない。

『文選』には，李善注と五臣注の 2 つの注がある。五臣注の出来はあまりよくないとされる一方で，李善注は高く評価され，杜甫の詩作にも多大な影響を与えたという。この李善注の特質は，「言語の出所・用例を引き解する立場を執り，一個人の私意でかってに訓話をするという方法はとらぬ」[9]ことである。李善は「示作者必有所祖述(作者必ず祖述する所有るを示す)」とのこだわりを持っており，正文作者の言語表現には必ず典拠があるため，自分の判断によって解釈するのではなく，実証性を重視しながら言語表現を解読することを目的としていたのである。そのため，李善注は「古典と『文選』の正文作者の言語表現をつなぐ重要な役割を果たしている」[10]と言える。

このような特質を持つ李善注を通して『文選』を読むということはどのような意味を持つのか。富永は，「文学言語の創作とその継承をうかがい知ることができ，新たな創作への契機ともすることができる」[11]と考えている。本研究論文においても，『文選』は「文学言語の継承と創作の過程を知るのに格好のもの」[12]であると位置づけている。

『文選』正文中には 1113 例の「孤」を用いた言葉があり，そのうち，李善が注しているのは 45 例である。上述したように，李善が典故に忠実に注をつけていたことを踏まえると，李善が注をつけていないものの数が多いということから，「それだけその時々の新しい言葉が多かった」[13]可能性が高いと考えても差し支えないということになる。

なお，『文選』研究は，斯波六郎や小尾郊一，森野繁夫らによって進められてきた研究領域である。

〈中国文学史における代表的詩人―陶淵明〉

本研究論文において富永は，陶淵明を「文学言語の画期となる」と位置づけ，陶淵明までの展開を探っている。陶淵明の中国文学における位置づけを明らかにしておきたい。

陶淵明は，六朝時代東晋の詩人である。字は元亮(一説に，名は潜，字が淵明)。潯陽柴桑(江西省九江市)の人。東晋の名将陶侃の曽孫にあたり，母方の祖父は風流で聞こえた孟嘉である。29 歳の頃役人となるが，なかなか昇進できず，社会情勢も不安定な中，次第に役人生活に希望を失う。41 歳のとき，彭沢(江西省彭沢県)の令となるものの，異母妹が亡くなったのを機に退職，郷里に帰る。代表的な作品に，辞職時の心境を述べた「帰去来辞」が

ある。

田園詩人として名高い陶淵明は，中国文学において先駆者とも言える欠かせない人物だ。長谷川滋成（2000）は，陶淵明について，「仕官と帰隠とを経験し，本来の自分と現実の自分との間を往き来する淵明は，内容としては官吏生活や田園生活の様子を独創的に詠い，表現としては象徴的効果をもつ対句や典故を用いて,独創的内容を深化･拡充させていく」[14)]と述べる。独創的な作品を生み出していく陶淵明は，自然詩人の先駆として後世に大きな影響を与える。陶淵明に影響を受けた詩人は，杜甫や白楽天，柳宗元など，数多い。

〈文学言語の継承と創作〉

『文選』李善注の活用の仕方には,「文献の校定資料」と「文学言語の創作と継承」の 2 パターンあり，富永は後者の視点の方が重要と考えている。これは，先述した李善注の特質を踏まえると,『文選』所収作品の作者らが古典の言葉をどのように利用して文学言語を創作したのかを追究することができるからだろう。実際に,本研究論文は後者の視点の下，執筆されたものである。本研究論文に限らず，富永は，李善注を用いて文学言語の継承と創作の過程を追究している[15)]。

文学言語の継承と創作については,『詩語のイメージ』(後藤秋正ほか編,2000）の中で「孤舟」「天涯」といった詩語のイメージの展開が用例をもとに明らかにされている。また，陶淵明をはじめ，詩人各々の精神生活や表現された世界観等を明らかにする等の目的で，詩人が用いている詩語を取り上げ，イメージの継承・創作を探究した研究も少なくない。例えば，三枝秀子（2005）は，陶淵明の用いる詩語について考察している。「知名」については「従来の『負の感情』を表現する言葉を用いて，逆に『正』の感情を表現している」[16)]ことを,「楽天」については「負の感情から正の感情へと変化していることが認められ，従来の表現を逸脱している」[17)]ことを明らかにしている。

本研究論文では,「孤」という漢字一字に焦点が当てられている。だが,管見の限りでは，熟語の形でそのイメージの展開を探っているものの方が目立つ。富永は,「孤」が様々な語に冠して寂寥や孤独などの情を表現する語であるということを踏まえ,「孤」を伴った詩語をもとに,「孤」という語の持つ意味を抽出しようとしたのだと考える。詩語の意味の根源にあるのは，一つ一つの語が持つ意味やイメージである。つまり，根源的な部分を明らかにしようとした研究と言えよう。

〈中国古典文学における孤独(感)〉

本研究論文は，孤独感を象徴する言葉である「孤」に焦点を当てている。そこで，中国古典文学における「孤」及び孤独(感)に言及した先行研究についても見ておこう。

「孤」は,「さまざまな語に冠して，隠逸・望郷・別離・流謫・老病に孤高・寂寞・憔悴・傷心・悲哀などの種々の情感をこめて詠われている」[18)]。しかし,「２．研究論文の構成と構造」で述べたように,『詩経』の頃からこのような形で用いられていたわけではない。

孤独の最も古い用例は,『礼記』の王制や『淮南子』の時則訓などに見えるが，この時点の孤独は「主として物質生活上における，たよりのないものをいう」[(19)]ものであったようだ。現在使われるような精神生活上の意味を含むものが初めて現れたのは，2 世紀の中頃以後とされる。中国古典文学における孤独感と言えば，まず第一に隠者の気持ちが挙げられよう。隠者は,「周囲と隔絶された感じをもち，そこに大なり小なり自己の孤独を感ずることがあったのではないか」[20)]と斯波六郎(1958)は推測する。こうした思いが作品として多く表現されてきたのだろう。

具体的に，代表的な詩人の作品にあらわれた孤独について整理する。屈原から王羲之に

至る孤独感は,「境遇からおこるもの」と「生命のはかなさからおこるもの」の2つに大別できる。この2つの孤独感をしみじみと味わって巧みに歌い上げた詩人として，陶淵明が位置づけられる[21]。斯波（1958）は，陶淵明の詩における孤独について,「主として，社会と調和できないが為に涌いた孤独感を湛えたものと，主として，人生のはかなさを嘆くが為に涌いた孤独感を湛えたもの」[22],そして,「ただあるがままの自分そのものが所詮ひとりぼっちという自覚から生れたもの」があるとする。ただし，斯波（1958）が陶淵明の孤独感について考察する際に対象とした詩は,「孤」が使われている詩に限らない。

陶淵明の孤独については，長谷川滋成も著書『陶淵明の精神生活』(1995）で,「孤独（ひとり)」という観点を設け,考察している。「孤」には，動詞を修飾する場合，名詞を修飾する場合，名詞とする場合とがある。中でも，名詞に用いられる孤・独について，陶淵明以前の「身内を失い依るべのない一人ぼっちの人」という原義の用法と陶淵明の用法を比較し，次のように述べている[23]。

> 淵明が名詞として用いる孤・独は，身寄りがないという原義ではなく，一人だち，あるいは仲間はずれという淵明自身の人生観・哲学をいう語である。その意味において，名詞として淵明の用いる孤・独は従来にはない，新たな価値観を付与した語として注目されよう。

富永は陶淵明の「孤」は「独自性」を表現していると結論づけており，多少捉え方に違いが見られるが，やはり陶淵明が「孤」に新たな価値観を付与したことは間違いないようだ。

なお，本研究論文の中でも考察されている「孤松」については「因値孤生松」(「飲酒十二首」其の四 12）の「孤」を取り上げて「寂寥・孤独というより，孤高・崇高が感じられる」[24],「孤往」については「淵明は孤りで田園に往き，隠者の丈人と同じ生活ができたことに満足しており，ここには寂寥や孤独はない」[25]と長谷川（1995）が考察している。これらについては，富永も同様の見解を示している。

３－２．研究領域における本研究論文の位置づけ

ここでは，前項で整理した内容を踏まえて本研究論文を再度読み解き，その位置づけを考察する。また，本研究領域における研究の枠組みについても明らかにしたい。

『文選』李善注は富永の専門とする研究分野である。本研究論文を読み解くと，これまでの研究で生じた疑問・仮説や注目した観点などからテーマを設定し，自らの専門を活かして探究していくという流れが見えてくる。実際，富永本人によると，陶淵明の「孤松」の先者の考察に対する疑問が本研究論文執筆の出発点であったという。ここで「孤」の持つイメージを明らかにするために『文選』李善注を用いた背景には,やはりこれまでの『文選』研究の中で李善注の可能性を捉えてきたということがあるだろう。

『文選』李善注以外の基本情報との関連についてもまとめておこう。

前項では，陶淵明のみ取り上げたが，宋玉や陸機に関する知識も論文作成において不可欠である。第１章の中で，先秦までのイメージを整理しているにも関わらず，第２章において戦国末の宋玉を考察の起点にしたのは，屈原の影響を強く受けた人物であることが関係していると思われる。『詩経』の頃は精神的な苦悩の表出や複雑な表現が見られなかった孤独感を，屈原は「烈しい孤独の苦悶を複雑な表現で歌」った[26]。宋玉はこの屈原の孤独の表現を継承しているのである。第３章では，「孤」に対する評価を扱っている。時代の流れの中で創出された意味が定着し，継承され

るには，ある段階で評価を受けることが必要になろう。「孤」の場合，「鰥寡独孤」のイメージが強くあったため，なおさらである。そこで，言葉の創出時期の確認にとどまらず，評価にまで言及したのだと推測する。陸機が「孤」の積極的評価の契機であったというだけでなく，文学理論にも通じ，多くの作品が李善注に引かれている当時の代表的な詩人である陸機の評価だからこそ後代への影響があったと考え，取り立てて扱ったのではないだろうか。研究を進める上で，ここに示したような中国文学史における代表的詩人に関する情報は欠かせない。

先述したように，富永の考察と先行研究とが必ずしも一致するとは限らない。しかし，そこに至る過程を見ると，先行研究と関連づけたり，そこから推測して自らの見解を導き出したりしていることが分かる。孤独は，詩の中でしばしば詠われる情感の一つであるが，その内実を明らかにした研究は多くない。これまでの研究内容も参考にしながら，「孤」に焦点をあててその意味を追い，「孤」を伴った詩語が持つイメージではなく，「孤」という語そのものが持つイメージを明らかにしている。本研究論文は，唐代以降の「孤」を伴った詩語の継承と創作の展開を追究するための資料としてはもちろん，『文選』李善注の活用のあり方を示したという点でも価値を持つと考える。

関連する知識・情報を踏まえて改めて本研究論文を読み解くと，研究を進める上での思考の仕方も見えてくる。例えば，研究テーマを設定する際には「先行研究で言われていることは正しいのか」，用いる資料を選択する際には「最も適切な資料は何か」「自分の考えの裏付けとなる資料はないか」などと自問自答しただろう。後者の問いであれば，前項で整理したような関連する情報が想起されたに違いない。この点については，後節で詳しく述べる。

最後に，本研究領域における研究の枠組みについて考察する。本稿で取り上げた研究は，具体的に明らかにするものは異なるが，どれも多くの用例や注釈を調査し，文脈からその意味を考え，比較・分析を通して，その時代の言葉の意味や表現した内容を確定していることが分かる。中国古典文学領域において，この研究方法は学問を進める上での前提となる１つの枠組みと言えるのではないか。本研究論文も，「孤」の用例を探し出し，李善注などを活用しつつその意味を確定して，研究のねらいに迫っている。

４．学習過程の再構築及び教材開発への示唆

さて，どうすれば学習者は漢文を読めるように，そして，理解できるようになるのだろうか。ここで対象とする学習者は高校生である。高等学校国語科で扱う漢文教材の中には，高校生が読むことに困難を覚えるものも少なくない。また，多くの授業が〈暗記〉と〈ドリル学習〉にとどまってしまっているのが現状だ。これでは表面的な理解にとどまってしまいかねない。学習者が自ら漢文を読んで理解し，深いレベルの読みに達するよう導くことを目指したい。そのための教材開発のあり方をここまで見てきた専門科学者・富永一登の学習課程から探っていく。すなわち，学習者が漢文を読み解くためのヒントを，本研究論文から抽出するのである。

専門科学者の学習過程(論文作成過程)を，各過程における具体的な思考法と併せて，下表のように再構築した。

学習過程	具体的な思考法
⓪研究方法の枠組みの理解 注釈・索引・用例の調査→比較・分析（異同の探究）→その時代における言葉の意味の確定	
①研究領域における基	・研究領域における重要な作品や人物は？

礎知識・基礎理論の習得	・同様の研究を専門にしている研究者は？ ・何をテーマにするか／何がテーマになりうるか。 ・取りあげるべき事象や人物，年代など，分析の観点になりうるものは？
②先行研究の調査	・明らかにされていること／いないことは？ ・テーマに対する他者の考えは？自分の考えとの相違点・共通点は？ ・疑問点はないか。 ・どのような仮説が立てられるか。
③資料の収集・選択	・関連する資料にはどのようなものがあるか。 ・最も適切な資料は？ ・裏づけとなる資料は？ ・探究するのに十分な情報を自分は持っているか。
④原義・定義の明確化	・研究に関わる用語・概念の意味は？
⑤究明	・自分の興味はどこにあるのか。 ・明らかにすべきことは何か。 ・研究の手順は？ ・何をどういう点から比較・分析すれば，テーマに対する答えを得ることができるか。 ・どの既有知識・情報と結び付くか。 ・引用した意見・用例は妥当か。 ・問いに対する答えが導き出せているか。 ・自分の考えはきちんと論証されているか。
⑥課題の発見・展望の提示	・今後明らかにすべきことは？ ・さらに深めるために検討すべきテーマや対象とすべき資料は？ ・見つかった課題はすぐに解決できるものか。

具体的な思考法に示したような問いが，学習を進め，理解を深めるための重要な視点となる。富永は，このような思考法を駆使して研究を進めている。学習者もこうした学習過程を踏み，思考を重ねることで，よりよく「読む」「理解する」ことができるのではないか。なお，上の①～⑤の過程は，『本を読む本』（M・アドラー,1978）で最も高度の読書レベルとされている「シントピカル読書」[27]の読みの段階に重なる部分が少なくないと考える。

以下，専門科学者の学習過程を学習者の学習過程に置き換えながら，学習者が漢文を「読む」「理解する」ことができるように導くための教材開発のあり方について考えていこう。

まず，最も肝要なのは，「興味を持つ」ことである。教材開発においては，いかに興味をもたせるかが鍵となる。作品に興味を持たせ，「面白い」「好き」と思わせることが，学習者自身が「読む」「理解する」ためには必要不可欠なのである。富永の本研究論文執筆の背景にも，先者の考察に対する疑問から生じた「孤」への興味がある。学習者も，興味を持つことができれば，自然と疑問や自分の考えを持ち，積極的に読もうとするだろう。作品をしっかり読もうとすると，文法事項等の習得の必要性も生じ，より定着することが期待できる。では，どうすれば学習者に興味を持たせることができるのか。ここで忘れてはならないのが，教師自身がその作品の内容に「興味を持つ」ということだ。教師自身が作品に興味を持つことができなければ，どうしても文法事項など技巧的な部分の指導にばかり目がいき，表面的な読みになってしまう。そうならないために，教師は，興味を持った部分をもとに，学習の中心となる発問や活動，そして教材を考えていくのである。もちろん，学習者の興味とずれることもあるだろう。しかし，教師の考えに対する反発もまた，興味を持って作品を読むきっかけとなる。したがって，教師が作品に興味を持ち，何をメッセージとして

学習者に伝えるかを吟味することが，教材開発の出発点なのである。

つづいて，関連づけるという思考に着目したい。富永は，自らの研究を進める中であらゆる疑問を持ち，自分の考えや既有知識と関連する研究や情報とを関連づけながら，新たな発見・理論を生み出している。学習を進める様々な場面で，関連づける作業を頭の中で行うことが必須となる。関連づけることは，自分に引きつける作業でもある。現代語で書かれた作品などを手掛かりに，今にも残る中国文学の影響などを学習者が自分なりに掴むよう導きたい。例えば,「比べ読み」は 1 つの有効な活動となるだろう。「比べ読み」とは，2 つ以上の教材を比較しながら読むことである。同じ出来事や人物を扱った作品や，関連する現代小説などが教材となろうか。こうした活動の中で上記の思考法を活用させることにより，他の文献から得た知識や情報との関連づけが行われ，作品の理解を深めることができると考える。

関連づける中で，作品中に書かれていないことを推測させ，自分なりの見解を導き出させることも重要である。富永も用例や注釈，先行研究をもとに，そこから導き出した自分の考えを提示している。漢文の授業が表面的なものにならないためにも，学習者が自分の考えを導き出すための場を用意したい。1 つの案として，漢字が表意文字であることを利用して，どのようなことが書かれているかをイメージさせ，その内容を文章や絵で表現させる活動が考えられる。表現したものをクラスメイトと比べると，違いがあるだろう。その違いが生じる理由を，各自が着目した言葉やその意味に目を向けさせて探り，言葉の意味，そして作品全体の理解を図っていくのである。これは，文法事項の確認や内容の表面的な読み取りにとどまらない授業を展開する 1 つの手立てとなる。このとき，しっかりと学習者が読んで考える時間を確保したい。専門科学者も短時間で研究論文を書き上げるわけではない。発見や課題は考え続ける中で見えてくるものである。

学習者が漢文を「読む」「理解する」ためには,教材とする作品だけでは難しい。やはり，先に整理した学習過程からも分かるように，様々な資料が必要になる。だが，学習者は自分で必要な資料や情報をすべて集められるわけではない。そこで，情報提示の手段としても，思考法を習得させる手段としても，学習の手引きはぜひとも工夫していきたい。

作品を読んだ後には，学習者個々に読んで理解したことの成果を自覚させることも大切である。つまり，作品内容の振り返りだけでなく，読んでよかったこと，新たに考えたこと，発見した作品の魅力などを表現，交流させるのである。このことが，次の学習への意欲となり，先述した「興味を持つ」ことにつながっていく。

もちろん，漢文に限らず，あらゆる文章に上記の学習過程及び思考法は活用できる。むしろ，学習者の抵抗感が小さい現代文教材を用いて，上述したような活動を経験させ，思考法を身に付けさせることが，学習者が漢文を「読む」「理解する」際の助けとなるだろう。

漢文の授業において，作品の構造や文法事項を教えることは必要である。だが，これが第一義になってしまってはいけない。作品を味わい,深層まで読むことを常に心がけたい。このことが，学習者に，漢文を「読む」「理解する」ための方法を習得させることにつながると考える。ここでは特に，学習者が「興味を持つ」こと，そして，関連づけたり，推測したりすることを通して自分なりの解釈を生み出すことが重要であることを示した。その中で得た成果を学習者個々が自覚し，新たな興味の種を持つというサイクルが形成されることが好ましい。そのために,教師にもまた，作品内容に「興味を持つ」ことが求められる。その上で，学習者の興味関心などを踏まえな

がら，「何に着目させるか」「どの教材が適切か」「どの思考法を使わせるのがよいか」等を考え，理解の仕方の習得を促す学習を模索することが，教材開発の基本となる。

註

1) 富永一登（2004）「『孤』を用いた文学言語の展開—陶淵明に至るまで—」『未名』22，p.9
2) 注 1 に同じ，p.13
3) 注 1 に同じ，p.25
4) 注 1 に同じ，p.26
5) 注 1 に同じ，p.3
6) 注 1 に同じ，p.26
7) 富永一登（1999）『文選李善注の研究』研文出版，p.5
8) 注 7 に同じ，p.487
9) 注 7 に同じ，p.5
10) 注 7 に同じ，p.216
11) 注 7 に同じ，p.223
12) 注 7 に同じ，p.1
13) 注 7 に同じ，p.3
14) 長谷川滋成（2000）『『文選』陶淵明詩詳解』溪水社，p. ii
15) 富永一登（2004）「『文選』李善注引陸機藩岳の詩文—李善注から見た文学言語の継承と創作—」『中国中世文学研究』45・46, 157-172 等
16) 三枝秀子（2005）『たのしみを詠う陶淵明』汲古書院，p.137
17) 注 16 に同じ，p.140
18) 注 1 に同じ，p.3
19) 斯波六郎（1958）『中国文学における孤独感』岩波書店，p.1
20) 注 19 に同じ，p.13
21) 注 19 に同じ，p.136
22) 注 19 に同じ，p.137
23) 長谷川滋成（1995）『陶淵明の精神生活』汲古書院，p.105
24) 注 23 に同じ，p.87
25) 注 23 に同じ，p.89
26) 注 19 に同じ，p.17
27) 「シントピカル読書」（M・J・アドラー他著（1978）『本を読む本—読書家をめざす人へ』TBS ブリタニカ，pp.212-213）

【第１段階】準備作業で関連書とした書物を点検し，もっとも関連の深い箇所を発見する。【第２段階】主題について，特定の著者に偏らない用語の使いかたをきめ，著者に折り合いをつけさせる。【第３段階】一連の質問をして，どの著者にも偏らない命題をたてる。この質問には，大部分の著者から答えを期待できるようなものでなければならない。しかし，実際には，著者が，その質問に表立って答えていないこともある。【第４段階】さまざまな質問に対する著者の答えを整理して，論点を明確にする。あい対立する著者の論点は，必ずしも，はっきりした形で見つかるとは限らない。著者の他の見解から答えを推測することもある。【第５段階】主題を，できるだけ多角的に理解できるように，質問と論点を整理し，論考を分析する。一般的な論点を扱ってから，特殊な論点に移る。各論点がどのように関連しているかを，明確に示すこと。

主要参考引用文献

エリン・オリヴァー・キーン著/山元隆春，吉田新一郎訳『理解するってどういうこと？—「わかる」ための方法と「わかる」ことで得られる宝物』新曜社，2014 年。
岡村繁『文選の研究』岩波書店，1999 年。
釜谷武志『陶淵明—〈距離〉の発見』岩波書店，2012 年。
後藤秋正・松本肇編『詩語のイメージ—唐詩を読むために』東方書店，2000 年。
三枝秀子『たのしみを詠う陶淵明』汲古書院，2005 年。
斯波六郎『中国文学における孤独感』岩波書

店，1958 年。
富永一登「『文選』李善注考—釈義の注について—」『広島大学文学部紀要』57，1997 年，pp.60-78。
富永一登『文選李善注の研究』研文出版，1999 年。
富永一登「『文選』李善注の活用—注引曹植詩文から見た文学言語の創作と継承—」『六朝學術學會報』4，2003 年，pp.73-88。
富永一登「『孤』を用いた文学言語の展開—陶淵明に至るまで—」『未名』22，2004 年，pp.1-32。
富永一登「『文選』李善注引陸機藩岳の詩文—李善注から見た文学言語の継承と創作—」『中国中世文学研究』第 45・46 合併号，2004 年，pp.157-172。
富永一登「『文選』李善注引「子虚賦」「上林賦」から見た文学言語の継承と創作」『『文選』李善注を活用した文学言語の創作に関する研究』広島大学大学院文学研究科，2006 年，pp.133-146。
富永一登ほか「新学習指導要領に向けての授業実践 3—近現代の文学作品を入り口にした親しみやすい漢詩・漢文の学習—」『学部・附属学校共同研究機構研究紀要』39，2011 年，pp.195-200。
長谷川滋成『陶淵明の精神生活』汲古書院，1995 年。
長谷川滋成『『文選』陶淵明詩詳解』溪水社，2000 年。
ハビエル・ガラルダ『自己愛とエゴイズム』講談社，1989 年。
松浦友久編著『漢詩の事典』大修館書店，1999 年。
M・J・アドラー，C・ヴァン=ドーレン著/外山滋比古，槇未知子訳『本を読む本—読書家をめざす人へ』TBS ブリタニカ，1978 年。
諸富祥彦『孤独であるためのレッスン』日本放送出版協会，2001 年。
吉川幸次郎，黒川洋一『中国文学史』岩波書店，1974 年。

著者
大野 綾香　広島大学大学院教育学研究科博士課程前期
富永 一登　広島大学大学院文学研究科
山元 隆春　広島大学大学院教育学研究科